津田昇平教話　第十四話

令和三年一月十四日　朝の教話

ご信心して、大厄は小厄に、たらいの水をうつしてしまえば、これまでのご無礼はお払い取りくださる。

令和三年一月十四日をお迎えさせて頂きました。

神様から、また今日も一日命を賜(たまわ)り、必要なものすべてお恵み頂いて、おかげの中に生まれ、おかげの中で生活をさして頂き、おかげの中に死んでいくんですけれども、今日もまた、おかげの中で生活をさせて頂いております。おかげの中で休ませて頂いて、おかげの中で夜の間も眠らせて頂き、神様にはお働き頂き、その間も、またおかげの中で目覚めさして頂いて、一日をスタートさして頂いております。

今日は今日の分母で、今日のできるところを神様と一緒に、金光大神(こんこうだいじん)様と一緒に過ごさして頂くことができたら、それでいいかなぁと思いますね。今日の分母は今日の分母でございますから、その日その日の分母

に応じて、無理がないように、足りないところ、行き届かないところ、ご無礼お粗末不行き届き、そういったところをお断り申し上げながら、神様、金光大神様にお縋(すが)りして、足して頂いて、お力添え頂いて、そして今日一日をつつがなく終えることができるように、それを願って、今月今日、今、今こそ、神様と共に生きさして頂きたいと思います。

信心させて頂いておりましたら、おかげが頂けるということ、前向きなことで言えばね、おかげを頂けるわけです。おかげというのでも、目に見えてプラスのこと、まあすごく単純なことで、宝くじ当たったじゃないけど、ゼロの状態がものすごいプラスになるような、そういうおか

げもあれば、マイナスが非常に大きいところを、小さいマイナスにまつりかえて頂いたり、あるいはマイナスがあるところをゼロに戻(もど)して頂いたり、上昇していくのには変わりはないんですけれども、起こってくる事柄が、どっからスタート、起点に考えるのかによって、ずいぶん違いますね。

ゼロのところから、すごいいいことが起こった。もうプラスでしかないっていうふうなことであれば、何より分かりやすいんですけれど。でも、起点とするところ、基準とするところが深いマイナスのところであれば、そこからどうやっておかげを頂いていくんかっていうのが、やっぱり大事なとこですね。

「信心さして頂いたら、難(なん)はみかげにして頂ける」と教祖様は仰って、難はみかげ、難はみかげってよう言いますけど、難儀(なんぎ)ということがおかげ、というふうな単純なことというよりは、どんな難儀も、信心さして頂いたらおかげになっていくということでありますし、また、どんな難儀な中にでも、神様は助かり救いの糸を練り込んで下さっておりますんで、そのまんまであれば、難に呑(の)まれてしまうだけなんだけれど、でもそこを、神様が助かりの糸を練り込んで下さってますんで、こちらがしっかりと神様に向かって信心さして頂いたら、そして神様と一緒に、その難儀と向き合わして頂いていくと、その難儀の中に助かりの糸が込め

られてますから、その糸を手繰(たぐ)っていくと、助かりのほうへと導いて頂ける。蜘蛛(くも)の糸のようにね、苦しいところから上の方に引っ張り上げて下さるというもんやと思います。

とは言うても、大難(だいなん)というのもあれば、まあ小難(しょうなん)というのもありますね。文字通り、大きな難儀というのもあれば、小さな難儀ということもあります。どれが大難か小難かっていうのは、もうそれぞれなんですけれども、自分の中で感じているものが大難、まあ傍(はた)から見たらどうかっていうのは少し置いといて、自分にとってこれは大きな難儀で、苦しいことで大変なもんだっていうことだって当然あるわけです。そこを信心さして頂いて、お取り払い頂いていく。取りさばいて頂く。「取りさばき」

というのと「取り払い」というのじゃ、ちょっと違いましてね。「さばく」って言葉を聞くと、怖いことにね、裁判でもそうですけれど、「取りさばく」ということになってくると、やっぱりものすごい痛みを生じるんですね。取り払いっていうのは、まあ言ったら耐え得るところっちゃ耐え得るところでしょうね。まあ、日々大便小便で悪いものをお取り払い頂くっていうのもそうでしょうね。

でも、取りさばきになってくると、耐え難いほどの痛みやら苦しみやら、そういったものもありながらでも、取って頂く。まあ、手術をちょっと想像したほうがいいかもしれませんね。お腹を下して痛いのも、そらまあ、それもお取り払いであろうと思いますけれども、お腹を裂いて手

術して、悪いものを取って頂くってなって、これはお取りさばきになりますね。

体だけじゃないです。体であったり心であったり、財のこと、人間関係のこと、仕事、家庭、学校の上、いろんな事柄であるわけですけど、それらも、お取りさばきの時もあれば、お取り払いの時もある。ま、どちらにしても、神様のおかげを頂いて、大変なところを、それに呑(の)まれて潰(つぶ)されるんじゃなくって、そこを神様にお縋(すが)りさして頂いて、引っ張り上げて頂くというところ。それが大事なところやなぁと思いますね。そのまま溺(おぼ)れるんじゃなくて、しっかりと岸まで引き上げて頂かんといけません。でも引っ張り上げて下さるのは神様と思うても、糸っていうのは

まあ、金光大神様(こんこうだいじん)かもしれませんなぁ。そやけども、しっかりと氏子(うじこ)の方も、その金光大神様、神様が垂らしてくれはった、金光大神様の手をしっかりと握って、じゃあこちらはこちらで一生懸命(いっしょうけんめい)、例えば握ってたとしてもですよ、こちらだけで握ってたんやったら、やっぱりちょっと限りがありますよね。お互いにしっかりと繋(つな)ごうとしておかないと、やっぱり力は、ま、糸の手が切れる、糸が切れる、ま、神様の糸は切れませんけど、人間の方が、氏子の方が手を離してしまうっていうことはあり得ることですね。そないにならんように、こちらも必死で、なんとか掴(つか)まして頂こうとするわけですけど、でも、信心する側もしっかりとその手を離さんように、しっかりと縋らして頂いて、掴まして頂かんと、やっ

ぱり神様も救い助けようと思ってもできないですよね。

釣りをされたことがあるんやったら分かりますけど、そら糸を垂らして魚がかかっても、やっぱり引っ張り上げるのは神様やとしても、糸が切れてしまったらどうしようもないですしね。で、引っかかってたものがパッと外れてしまっても、それも仕方がないです。これもどうしようもないですね。だから、引っ張り上げて頂く時っていうのは、助かりなんですけれども、楽になっていくために、その間ちょっと痛みが生じるっていうこともよくあることやと思います。そこを信心辛抱さして頂いて、お縋りさして頂いて、引っ張り上げて頂くということは、ほんまに大事なことやなぁと思います。

金光様のご理解に、

「金乃大神様へご信心いたすなれば、大厄は小厄におまつりかえ、また小厄はお払い取り（※お取り払い）を御願いあげよ。

物にたとえれば、たらいにいっぱいためた水を屋根棟からぞろぞろとうつしてみよ。これが小厄の引別（例え）ぞ。それをどうとうつせば、大厄の引別なり。ご信心して、大厄は小厄に、たらいの水をうつしてしまえば、これまでのご無礼はお払い取り（※お取り払い）くださる。後は、まことに繁栄をいただくなり」

とあり。

【理Ⅰ　斎藤宗次郎（さいとうそうじろう）　十八】

というふうにしてね、ご理解頂いております。たらいに水をいっぱい入れて、それをこうザーッと流すか、あるいはちょろちょろと流すかっていうことですねえ。

よく私、これ言うんですよね。例えばお家を買いたいと思って、この辺で家買うっていうたら、そらピンキリでしょうけど、仮に三千万くらいだとしましょうか。じゃあ三千万ぐらいで家を買おうとなった時にでも、じゃあ今すぐパッと払ってって言って、そらパッと払えたらいいん

ですけど、でも、じゃあ家を買わして頂こうと思っても、なかなか一括(いっかつ)でっていうことはできにくいという場合も多いでしょう。そうすると、ローンを借りるわけですね。で、お金を借りるわけです、銀行とかね。銀行から借りて、月々それをその銀行に支払っていくわけですけども、家を買ったというふうにして思っててもですよ、一括で支払わないとってなってきたらこれ、なかなかできないところでも、分割で何十回と、まあ場合によっては何百回と分けて頂いたら、そしたらまあ、購入できるということがありますね。

お取り払いっていうこと、お取りさばきということ考えても、これ、まあ自分の借金やと考えてみて下さい。天地に対する借金がめぐりやっ

ていうふうにして考えたら、おかげを頂いて、借金を返したいわけです。マイナスなところをゼロにしたいわけですね。自分の身の上に起こっているマイナスな事柄を、何とかしてゼロに戻したいと思う。じゃあ一気に、それを返そうと思うたら、今度どうなるかと言ったら、もう本当に命が持たんようになるってこと、やっぱりありますねえ。そこを一回で取り払って頂くっていうんじゃ、自分の命が持たない時に、分割にして頂く。それを、まあそれは三年五年十年の分割なんか、二十年ローンなんか分かりませんけど、でも大きい難儀（なんぎ）であればあるほど、根が深ければ深いほど、めぐりから出てきてる難儀であれば、まあ根が深いわけですけど、そういうもんであれば、やっぱり十年二十年っていう、そうい

う単位で、返済のおかげを頂かんといかんわけですね。

で、お取り払いを、ちょっとずつちょっとずつ頂いていく。でないと、人間の命というものが持たないわけです。身が持たないですよね。そこを神様がおかげにして下さるということは、生きながらにして返済ができるように、もう一括であったら命も全部、まあ言ったら引き取られてしまうわけですね。先祖が積んだんか、自分が積んだんか、どちらかのめぐりであって、借金の肩代わりに自分の命、おかげ、全部取っていかれるわけです。で、それは自分が自分で生み出したもんだから、まあしょうがないとはいえ、でも、神様は何とかしてそこを助けてあげたい、おかげを授けてやりたい、かわいい氏子（うじこ）をなんとかしてあげたい、そう

思って下さるから、できる限り、命のお守りを頂いて、まずは立ち行くように、最初にちょっと大変なようでもね、なんとか軌道（きどう）に乗って返済がコンスタントにできるように、神様は道をつけて下さいますね。

そう思うと、長らく病があってしんどいなぁという時にでも、これを一気に取ろうと思ったら、身が持たない。命が持たない。それを何度かに分けて、神様が取り払って下さる。そういうことはやっぱりあるなぁと。で、それは、本当はまあ、長く続くっちゃ長く続くんですけども、一気になってしまったら身が持ちませんのでね。だからそれを分けて分けて、神様がお取り払い下さっている、これは本当にありがたいことやなぁと思います。

本当におかげを頂いていくと、楽になっていくんですよね。だんだんと以前に比べて楽になっていく。で、楽になっていっているようなら、だったらこれもう、自分の借金がなくなったんか、めぐりの部分ですよね、難儀が全部取り払われたんかっていうと、そう単純でもなくて、とりあえず日常生活をきちんとできるような具合に、神様が、そういう塩梅（あんばい）にして下さっとるわけですけど。でもこれで、「あー治った」と思ったら、これはあてが違うんです。これはまだ、あてが違いますわねぇ。

だからしっかりと信心さして頂いて、根っこから断ち切って頂くためには、十年二十年っていうふうなスパンがかかる場合もあります。まあもっと短くで、パッとそら取り払ってもらったら楽ですけど。でも本当

に、人間の根っこの部分になってきたら、それぐらい時間はかかるということはありますね。

でも、大厄(たいやく)を小厄(しょうやく)にして頂く。神様に本当に手間暇(てまひま)をかけて頂いて、命もお守り頂きながら、おかげも授けながら、そして信心、ま、これも信心がないと無理ですからね。信心さして頂いて、先祖が積んだご無礼、自分が積んだご無礼も含めて、ご無礼、お粗末、不行き届きをお詫(わ)び申し上げて、そしてこれまでのご無礼、あるいは、教えによっては罪とも言いますけどね。「罪がめぐっている」っていう言葉もありますけれど、そういったものを、お取り払い頂ける。

その間、お取り払い頂いてるんですよね。知らず知らずのご無礼お粗末不行き届き。自分が積んだものもあれば、先祖が積んだものもあるんでしょう。まあでも、あれこれ言ってもしょうがないです。自分の人生ですから、そこを結局引き受けさせて頂いて、そこをお取り払い頂くしかないんですけど。

ま、そこを信心さして頂いて、神様が味方になって下さる、金光大神(こんこうだいじん)様が味方になって下さる。一人では到底できないところを、そこを一緒に通って下さる。神様は親様で、まあ金光大神様は親様としてね、ま、普通に考えたら赤の他人でする義理合(ぎりあい)なんてないかもしれません。それでもやっぱり、教祖様もね、ほんとに、何とか助けてあげたいという心で、赤

の他人である氏子(うじこ)を助けようとして下さるんですから、勿体(もったい)ないことです、ほんとにね。

そして、人を助けて下さるとは言うても、まあよう言いますけど、神様がどんなにいい神様でも、金光大神様がどんなに、金光大神、生神様でも、氏子の心が湿(しめ)ってたら、おかげになりませんので、だからしっかりと、氏子の側も信心さして頂かんとあきません。信心してるからこそ、おかげとして、お取り払いが始まるし、でもお取り払いも、長らく続くこともあります。そしたらまあその間、借金の返済ですから、しばらく痛いですしね。

「信心してんのに、なんで痛いことあるんや」言うて、「めぐりを取っ

て下さい、楽にして下さい」ってお願いするから、神様取ってやろうとするし、そやけど、取ってやろうとしたら痛い。じゃ、「痛いから結構です」ってなってきたら、だったら、神様もせっかく出した手を引っ込めてしまう、っていう教えもありますね。

じゃ、それでどないなるんか言うたら、その人、もっと難儀（なんぎ）になるだけの話なんですよ。生きづらくて難儀になっとるわけですから、その根本原因のところを、神様が取ってやろうとして下さる。そのためには、痛くても、そこを辛抱さして頂くしかないんですよ。で、辛抱できるものしか、与えて下さいませんのでね。

で、自分一人じゃできんところを、「金光大神様差し向け、願う氏子に

おかげを授け」ってありますね。それを、教祖様であれ、それぞれのお広前（ひろまえ）、時代、直信先覚先師（じきしんせんかくせんし）であれ、その時、その時代、その土地、その広前の、その人にとっての、氏子にとっての金光大神様を差し向けて下さり、万国に残りなくね。で、その御取次（おんとりつぎ）のまにまに、お取り払い、お取りさばきを頂かして下さる。一人じゃできないところをね、ま、言うたら主治医みたいなもんかもしれませんわね。手術や何やらも含めて、一緒に付き合って下さって、そしてお取り払い下さる。これはほんとにありがたいことやと思いますよね。

自分だけじゃなくって、その難儀っていうのは、自分の大事な人にぜーんぶ伝わっていくこと考えたら、自分のところで食い止めさして頂け

る。それが、神様が喜ばれて、本人も喜ばれて、また親族、ご先祖も喜ばれて、そして金光大神様喜ばれて、皆、喜ぶわけで。

でもこれ、ほっといたらって言うたら、もうまき散らすことになりますからねえ。自分が苦しんできた、ではあるけれども、自分が今度、加害者になって、自分の大事な人に、しんどいもの悪いもの、穢(けが)れたものをまき散らしてしまうってことは、多々あります。ま、そないならんように、信心さして頂いて、これ信心さして頂かんとあきませんわね。信心も、神様のおかげ、金光大神様のお祈り添え、お働き、お導きがあって、信心さして頂けるわけですけど、こういう場所もね、人も必要ですけど。

そうして頂いて、信心する上で必要なものぜーんぶ、一切合切(いっさいがっさい)、何から

何まで、もう勉強する言うてもね、ノートやら椅子(いす)やら、鉛筆やら消しゴムやら必要でしょ。それとおんなじで、信心さして頂くうえでも、お広前が必要であり、金光大神様が必要であり、お広前ね、こうしてお参りをさして頂けて。その中で、信心のお稽古(けいこ)をつけて頂ける。で、後はわが身わが一家を練習帳にして、いつでもどこでも信心できるわけですけど、でもそうやって、信心する上に必要なものもぜーんぶご用意して下さり、そして、信心しておかげを授けて下さるために、何もかもご用意して下さる。そして自分が信心さえすれば、後は自分がおかげ頂くんですからねえ。そら楽なもんですよ、そういう意味じゃあね。大変とは言うても、でも、おかげの中の難儀って、まあ思いますよ、ほんとにね。

だから、ここにあるように、「ご信心して、大厄（たいやく）は小厄（しょうやく）に、たらいの水をうつしてしまえば、これまでのご無礼はお払い取り（※お取り払い）くださる。後は、まことに繁栄をいただくなり」。そうやと思います。ほんとにね。そこをまた、神様おかげを授けてあげたいと思って下さってるわけでね。ただ、痛い辛いを与えたいなんて思ってらっしゃるわけではありませんのでね。しっかりと、神様がなんとか、しんどいとこ取ってあげようとして下さって、手術して、生きづらいやろう、歩きづらいやろう、痛かろう、不自由やろう、だから、神様が手当てして下さって、悪いものを取って下さって、こっから先は生きやすいように、暮らしや

すいように、機嫌(きげん)よう、塩梅(あんばい)よう生きていけるようにしてやろうと思うて下さるのが神様、親神様なわけですから。ま、そのご慈愛(じあい)をしっかりと頂かせてもらわんとあきませんわね。まあ「頂かない」とか言うても、頂かんと生きていけないんですから、どうせ下さるんやったら、粗末にならんように、しっかり頂かんとあきません。しっかり頂いて、おかげを頂いて、そして、受けたおかげを人に話して、真(まこと)の道を伝えていくっていうふうにして、今度また、人様の方に向かっていく。そこは御道(おみち)の信心の大事なところやなぁと思いますね。

はい、今日は今日でまた、信心、お互いさして頂いております。で、

日々(ひび)の信心で、大難(だいなん)は小難(しょうなん)、小難は無難(ぶなん)にして頂き、また神様に安心して頂けるようなね、そういう信心を今日も一日お稽古(けいこ)して、心がけさして頂きたいと思います。今日は今日の分母で、過ごさして頂きましょう。

よくお参りでした。

（了）

津田昇平教話　第十四話

令和三年一月十四日　朝の教話

令和四年八月十六日　初版発行

発行所　金光教尼崎教会

〒六六〇―〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三―七―五